拝啓　今年も早や４月末となりました。いつもエンカウンターをお読み頂きありがとうございます。今年は、３月に暖かい日が続き、桜が例年より１週間以上はやく咲きましたし、我が家のスイトピーも、１週間以上早く咲いたように感じます。近所の公園では、今はヒトツバタゴ（なんじゃもんじゃ）の花が、咲いています。

今回は、小西芳之助先生の『コリント人への第二の手紙講解説教』からの引用の９回目ですが、今回の「エンカウンター」の 3 ページ、「復活の生命が臨めば、力が出る」という項目には、次のようにあります。

「復活の生命が臨めば、力が出る

キリストの究極の救いの根源は「復活」にあります。永遠不滅の復活体となることであります。ロマ書 8 章の「信、望、愛」にはこのことが書いてあります。ロマ書 15 章 13 節、ロマ書の結論は、汝らにこの復活の望みを持たせることにあります。

この生命が臨まない限りは、人間に力が出て来ません。

人間には力が問題です。理想とか、道徳の教訓とか、そういうものはあった方がよいが、あってもそれを行なう力がなければナンセンスです。その力は、簡単に、直ぐには出て来ません。相当時間がかかります。聖霊が降臨して分かります。聖霊降臨日の意味がそこにあります。」

小西先生は、このことをいつも強調されます。なぜそうなるのかは分かりませんが、復活の生命が臨めば、力が出る、元気になるというのは、不思議ですが、確かなようです。

この一月に読んだ『一日一生』等の本から、感銘を受けた言葉を紹介します。

小西芳之助先生『主の御名を呼ぶ』4 月 21 日

「私のキリスト教を「恵心流キリスト教」という。何故か。私は、キリスト教信仰の最も深いところを恵心僧都（源信）から学んだからである。

第 1 に、彼は教えていわく、「偏に阿弥陀仏の浄土を求めよ」と。故に、私は彼に学び、神の国（における我らの復活）だけを願う。

第 2 に、彼は、阿弥陀仏の本願を信ずることを教え、かつ、念仏―阿弥陀仏の名を称えること―を実行することを勧めた。故に、私は彼に従い、イエスの約束（ヨハネ伝 3 章 14, 15 節）―イエスの十字架―を信じて、かつ、「わが主イエスよ」と呼ぶ（ロマ書 10 章 9, 10, 13 節）。

以上のことから、恵心流キリスト教は、次の 3 つのことから成り立っている。

第1.　イエスの十字架の贖いを信じること。

第2.　我らの復活だけを信じること。

第3.　「我が主イエスよ」と呼ぶこと、即ち、口で称えること。

このうち、第 3 が最も重要である。それは、第 3 が実行できれば、第 1 も、第 2 も死んでしまうからである。

新渡戸稲造先生『一日一言』4 月 24 日

「天の使いは人目の見えぬ所に潜みて助け、人耳に聞こえぬ声して導くものか。始終わが傍にいるらしい。彼らの守護がなかったなら、今までに幾度転び、幾度倒れ、火災、水難、数知れぬ禍いはこの身を亡ぼしたであろう。我に対して厚意を有し、我を守り、我が安全を祈る者は、我こそその在処（ありか）も姓名も知らざれ、必ず、広き世界にはあるなり。」

松下幸之助先生『続・道をひらく』「夏」

「人の歩みの山坂。汗をふきふきあえぎのぼる。苦しくても、どうしようもなくても、この山坂だけはやっぱりのぼらねばならぬ。そのなかから、人生の稔りの力が蓄えられてくる。それはエネルギーの消耗のようにも見えるが、本当はその間に、偉大なエネルギーが蓄えられてくるのである。

涼しい山坂も結構だが、やっぱり山坂には汗がほしいような気もする。時に耐えきれないような山坂があってもいいような気もする。夏が夏であってほしいように。」

内村鑑三先生『続一日一生』4 月 22 日

「クリスチャンが神の子であるのは、クリストが神の子であるからである。クリスチャンがよみがえるは、クリストがよみがえりたもうたからである。クリスチャンに永生があるは、クリストにそれが有るからである。クリストに有る者はすべてクリスチャンに有る。クリストに有り又有ったもので、クリスチャンに無いものはない。」

バークレー先生「ウイリアム・バークレイの一日一章」2 月 20 日

「祈り (2)

祈りは逃避ではなく、征服である。

祈りは私たちを助けて困難な立場から逃れさせてくれるからくりではない。祈りは私たちを助けて困難な状況に直面させ、これを征服させてくれるものである。

かりにわたしたちが苦しい状況にあるとしよう。私たちは助力と指導を求めて、誰か信頼できる友達のところに行く。さて、その友だちと別れた時、状況は少しも変わらず、相変わらず対決を迫っている。が、どういうわけかその友達に会ってから、同じ状況でありながら前ほど怖くなく、また前ほど苦しくない。

それと同じように、祈りは困難な状況からの逃げ道を提供してくれるものではなく、その状況に直面し、これを征服する力、もしくはこれに耐える力を与えてくれるものなのである。

祈りは、神に語るというよりもむしろ神に聞くことである。神にやってもらいことを申し上げるというよりもむしろ神の望みたもうことを聞くことである。」

カウマン先生『山頂を目指して』4 月 4 日

「神の遍在
私は夜明けに神を見出した、
夜が去っていく紅の中に、
小鳥の朝のさえずりの中に、
日の出の強烈な栄光の輝きの中に。

私は神を庭の中に見出した、
露に濡れたおだまきの中に、
恥ずかしそうに、つつましく
まとわりつく朝顔のつるの中に。

私は神を一片の雲の中に見出した、
壮大な大空の生気を受けて
高く飛んでいる
一片の白雲の中に。

私は、静かな田園を通って走る
車道に神を見出した。
そして、黄金のさざなみの立つ
夕暮れの湖上にも。

そして、ついにたそがれの
冷たい香りのよい空気の中に、
私は神のご臨在のささやきを聞き、
神がそこにおられることを知った。」

新型コロナは、5 月から、インフルエンザと同じ扱いにすることになるようです。最近の電車の中では、皆さんマスクをされている人が多いようですが、しばらくは、マスク、手洗い、うがいなどはこれまで同様実行されて、十分ご注意下さるようお祈り申し上げます。

4 月 24 日　　山口周三

エンカウンターの読者各位